

# バカの親友は鈍感系主人公

☆KONA

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリ主×翔子の小説がなかったので書くしかないと思いきい付きで書いています  
なるべく更新は頑張りますが処女作なので温かい目で見てください  
豆腐メンタルなのでアドバイスは受け付けますが誹謗中傷はやめてください  
勢いで書いているので見づらいたころもあるかもしれませんがご容赦ください  
最近リアルが忙しいので不定期更新になってます

# 目次

キャラ紹介	1
幼馴染は優等生	9
ここって教室か？	13
戦争まであと一歩	20
Dクラス戦	25
バカのラブコメはツンデレ	30
卑怯者にはお仕置きを	35
Bクラス戦前編	39
Bクラス戦後編	44
Bクラス戦 戦後対談	49
Aクラス戦 1回戦	54
Aクラス戦 2回戦	59
Aクラス戦 3回戦	

Aクラス戦 終結	64
日常はピンク色	72
清涼祭準備期間	75
恋する少女に戻るため	78
清涼祭開幕	82



# キヤラ紹介

Fクラス

橘真澄

好きなもの

友達

家族

料理

嫌いなもの

人の嫌がることを平気でする奴

友達を襲う脅威

本当はAクラスに入ることのできる学力は持っているが試験を受けている最中に隣の席の瑞希が倒れたため保健室に連れていきそれが原因で無得点となってしまった。他人に向けられる好意には敏感だが自分に向けられる好意には気づかない鈍感。そのせいでややもやしているものが多数存在している。

雄二と明久とは幼馴染である。雄二とは小学校からの付き合いで明久とは小学生の時に近所の公園で一緒に遊んでいた関係。

家族は転勤族で中学校の時から一人暮らしを始めた

吉井明久

好きなもの

家族

友達

食べ物を恵んでくれる人

ゲーム

嫌いなもの

勉強

友達を襲う脅威

真澄の親友。勉強が嫌いで学校全体が認めるバカである。文月学園史上初の観察処分者である。

そのほかは原作と変化なし

坂本雄二

好きなもの

家族

友達

明久へのいたずら

嫌いなもの

友達への過度ないじめ

友達を襲う脅威

真澄と翔子の幼馴染で真澄の親友。明久をいじめることはあるが本当に危ないときは助けてくれる頼もしい奴。優子に向けられる好意に無意識にはあるが意識している。そのほかは原作と変化なし

木下秀吉

好きなもの

友達

演劇

家族

嫌いなもの

友達に理不尽な暴力を振る人

友達を襲う脅威

真澄たちの親友。真澄たちとは学園に来てからの付き合いだがとても大切に思っている。助けを求められれば必ず助けに行く男らしさを持っている。

土屋康太

好きなもの

家族

友達

盗撮

盗聴

嫌いなもの

友達に手を出す奴

友達を襲う脅威

真澄たちの親友で真澄たちに近づく脅威を察知するといち早く教えてくれる諜報員の顔も持つ。そのほかは原作と変化なし

姫路瑞希

好きなもの

家族

友達



真澄

料理

嫌いなもの

暴力

友達を襲う脅威

中学校の頃に真澄に助けてもらってから真澄に好意を持ち始めて遠回しなアタックを試みるが気づいてもらえずもやもやしている。真澄に好意を持つものが多いことに焦りを感じている。

島田美波

好きなもの

友達

家族

明久

嫌いなもの

美春（嫌いというより苦手）

友達を襲う脅威

学園に入って助けてくれた明久に惚れつが自分の性格から照れ隠しで暴力をふるつ

てしまう自分に自己嫌悪している。これからは変わっていかうと頑張っている。

Aクラス

霧島翔子

好きなもの

家族

友達

真澄

真澄の料理

嫌いなもの

友達をけなす人

友達を襲う脅威

真澄と雄二の幼馴染。小学生の頃助けてもらい真澄に惚れているが真澄には気づいてもらえない。積極的にアピールをするが真澄には幼馴染が自分のお節介を焼いているという風にか思われていないので、最近はずっと過激なアピールをしようか迷っている。

木下優子

好きなもの

家族

友達

雄二

嫌いなもの

友達を襲う脅威

中学生の時に道でチンピラに絡まれているときに雄二に助けてもらい惚れた。当時は名前を知らなかったが秀吉が友達として紹介してきたときに名前を知りそこから何とか雄二を振り向かせようと趣味だったBL集めをやめ最近はフアッション雑誌を買って自分磨きをしている。

工藤愛子

好きなもの

友達

家族

康太

友達をからかうこと

嫌いなこと

友達に対する過度ないたずら

友達を襲う脅威

Aクラス戦に負けてから康太を目で追うようになり自分の恋に気づき康太にアタックするが成果はあまりない

そのほかは原作と変化なし

久保利光

好きなもの

友達

家族

嫌いなもの

友達を襲う脅威

ゲイでないところ以外は原作と変化なし

# 幼馴染は優等生

? 「・・・きて。お・・・て。おきて」

俺は体の上に重みを感じながら目を覚ました

? 「おはよう、真澄」

上に乗っていたのは幼馴染の彼女だった

真「おはよう翔子。それといつも言ってるけどこんな起こし方いくら幼馴染でも男にしちやダメだろ」

そう彼女は霧島翔子。何かと俺を気遣ってくれる大切な幼馴染だ。

翔「大丈夫、こんなこと真澄にしかしないから」

真「そういうことじゃなくて、俺にもしちやだめでしょ。俺が間違いを起こすかもしれないだろ」

い　これまで俺は翔子にこれをやめるよう何度も説得をしているが聞き入れてもらえな

翔「真澄なら：／／／」ボソツ

真「何か言ったか? 翔子」

翔「なんでもない。そんなことより時間」

俺は翔子に言われ時計を見ると…

真「まずい、遅刻する。翔子先に行け今から出ればお前は間に合うだろ」

翔「待ってる。一緒に行きたい」

真「じゃあ、すぐ準備するから玄関で待ってて」

翔「わかった」

俺がそういうと翔子は部屋を出て行った

それから俺は準備を手早くすまし翔子のもとへ行った

翔子 side

私はいま幼馴染の家の前で彼を待っている。彼の名前は橘真澄。私の最愛の人だ。私は彼に何度もアタックしているのにもいつもスルーされてしまう

周りにも彼を慕う人はたくさんいるのにことごとく気づかない鈍感である

翔「はあー、私って魅力ないのかな」

彼のせいでこんなことを思うのは日常茶飯事である

でも私が彼を好きなのは変わらない、どんなにライバルがいても負けられない

そんなことを考えていると

真「待たせたな翔子」

彼が笑顔で家から出てきた

翔「じゃあ、いこうっ」

私は彼の手を取って学校へと歩き出した

side out

真「時間やばいと思つたけど結構余裕だったな」

俺たちは桜並木を通りながら学校へと向かっていると校門の前に一人の男性が立っていた

鉄「お前たちにしては遅かったな、おはよう霧島、橘」

翔「おはようございます西村先生」

真「おはようございます西：鉄人」

鉄「橘、鉄人ではなく西村先生と呼べと何度言わせるつもりだ」

この男性は西村宗一トライアスロンを趣味とし、アマチュアレスリングの心得もある肉体派教師でみんなからは「鉄人」と呼ばれている

鉄「まあいい、それよりほらこれがお前たちのクラスだ」

翔「ありがとうございます」

真「どうせ翔子は見なくてもクラスわかってるでしょ。とりあえず教室向かうか」

鉄「橘、ちゃんと自分の教室確認しとけよ」

真「はいはい」

霧島翔子

Aクラス(学年、主席)

橘真澄

Fクラス



ここって教室か？

翔子と真澄は自分たちの教室を目指していた。

そして、Aクラスに着き二人は驚愕した

真「ここは教室なのか？」

翔「すごい。1年生の時もすごかったけどここはそれ以上にすごい」

真「とりあえずお前は教室入れよ。俺も自分の教室行くから」

翔「わかった。また、昼休みに行くから」

真「そんな無理する必要ないぞ。ここから旧校舎にあるFクラスまでそれなりに距離あるし」

翔「いい、好きでやってるから」

真「ありがとう、じゃあまたあとでな」

そう言うと、真澄は翔子の頭を撫でFクラスへ向かっていった。

翔子の顔が真っ赤になっているのに気づかずに。

真「ここがFクラスか、いまにも倒壊しそうだな。まあそんなことより中に入るか」  
教室に入ると見知った顔があった

真「よお、やっぱりお前らもこのクラスだったか。雄二、康太、秀吉」

雄「なんでお前がここにいるんだよ真澄」

康「：なんでここにいるんだ真澄」

秀「なっ、どうしたのじゃ。おぬしの成績ならAクラスに行けるじやろうに」

真「お前らどうせ楽しいことするんだろ、俺も混ぜろよ。そういえば、明久はどうしたんだ？まさか別のクラスに行ったとか言わないよな」

雄「そんなわけあるか、そんなことが起こったら明日空から槍が降ってくるぞ」

康「たしかに」

秀「おぬしらそれはさすがにひどいんじゃないか」

そんな話をしているとホームルームの時間が来ていた

雄「先生来ないし代表の俺が教壇に立つかな」

真「まあいいんじゃないか」

そして雄二が教壇に立っていると教室のドアが開きバカが入ってきた

明「おはよー雄」「ささっと座れこのウジ虫野郎」うってなんてこと言うんだよ雄二

雄「うるせえ、さっさと座れ」

？「ちよつといいですか？」

明久と雄二の後ろから初老の男性が現れた

? 「全員座ってください、私はこのFクラス担任の福原慎と言います。では廊下側の人から自己紹介をしてもらいましょうか」

「近藤です。よろしくおねがいます」

秀「木下秀吉じゃ、趣味は演劇じゃ。あと言っておくがわしは男じゃぞ」

『バカな』『ちよつと待て、男じゃないとは言ったが女じゃないとは言っていない、あいつは第3の性別秀吉なんだ』『お前天才だな』

秀「わしは男じゃー」

康「土屋康太、趣味は盗さ…なんでもない。特技は盗ちよ…なんでもない」

「島田美波です。帰国子女なので日本語がちよつと苦手です。趣味は吉井明久を殴ることです」

明「ちよつとなんてこと言ってるの島田さん」

美「はろはろ、吉井」

「須川です。よろしく」

明「吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでください『ダーリン』いやいいです」  
真「橘真澄だ。趣味は剣道と料理、特技は特にない。これからよろしくな」

福「じゃあ最後に代表のあいさつを「遅れましたー」丁度よかったですいま挨拶をしていたので姫路さんも挨拶をしてください」

姫「わかりました。姫路瑞希です、よろしくお願いします」

「あのく、なんでここにいるんですか」

瑞希が挨拶をすると男子生徒の一人が質問をした

姫「試験の時熱が出て途中退席してしまって」

『あく科学の問題か、あれは難しかったもんなー』『俺は弟が熱を出して勉強できなかつたな』『黙れ一人っ子』『俺は前の日彼女が寝かせてくれなくてな』『今年一番のウソありがとう』

他の奴らがバカなことを言っている間に瑞希は席に着いた

真「だいじょうぶだったか姫路」

姫「あつたつ橘君。だいじょうぶですよ、それと試験の時はすいませんでした。私の付き添ったから橘君も無得点に」

姫路は申し訳なさそうにうつむいていた

真「そんなこと気にするな、もともとFに来るつもりだったしな」

姫「でも」

真「過ぎたことは気にするな。これからだろ」

姫「そうですね、ありがとうございます」

真「やっぱり笑っていたほうがかわいいな」

姫「ありがとうございます／＼」

真「顔が赤いが大丈夫か？まだ熱があるんじゃないか？」

姫「だつ大丈夫です」

真「無理だけはするなよ」

姫「ありがとうございます」

そんな話をしていると雄二のあいさつが始まった

雄「このクラスの代表の坂本だ、ここでみんなに質問だ。不満はないか『おおありだ』』『Aクラスの教室を見たが全然違うぞ』『学費が安いとはいえこれはひどすぎるぞ』『Aクラスも同じ学費なのにこの差はおかしいだろ』Aクラスは個人用の冷蔵庫・エアコン・ノートパソコン・リクライニングシート・システムデスクが支給されている。そこで俺はAクラスに対して試召戦争を仕掛けようと思う」

『無理だ』『勝てるわけがない』『これ以上設備落とされたくない』『姫路さんがいればもう何もいらぬ』

雄「大丈夫だこのクラスなら勝てる、それを今から証明する。康太いつまで姫路のスカートを覗いてるつもりだ」

姫「きゃっ」

康「そんなことはしていない」さすさす

雄 「こいつはムツツリーニだ」

『なんだと』『あいつがそうだというのか』『見ろまだ畳の後を消そうとしているぞ』『ムツツリの名に恥じない行動だ』

康 「そんな事実はない」ブンブン

雄 「こいつは保健体育の成績はＡクラスにも負けない、そして姫路と橘もいる」

姫 「わたしですか？」

真 「おれもか？」

雄 「そうだうちの主戦力だ、たのむぞ。そして、木下秀吉もいる。こいつは、演劇部のホープで姉はＡクラスだ、俺も全力を出す」

『坂本って小学生の時神童って呼ばれてたって聞いたことあるぞ』『実質Ａクラス並の成績保有者が３人もいるのか』『勝てるぞ』

雄 「それに吉井明久もいる」

『誰だそいつ』『聞いたことないぞ』

明 「ちよつと雄二なんで僕の名前なんか言うのさ」

雄 「みんな、こいつの肩書は観察処分者だ」

『それってバカの代名詞なんじゃ』

明 「ちよつとお茶目な１０代男子につけられる肩書だよ」

雄「そうだバカだ明「ちよつとはフォローしてよ」うるさいから黙つとけ、こいつの召喚獣は特別で教師の雑用をするために物を触れるようになってる。これはかなりのアドバンテージになる。ここまでの戦力がそろつてて負けると思ふか」

『本当に勝てるんじゃないか』

雄「そうだ今こそペンをとれ、成績だけがすべてじゃないと教師どもに教えてやれ」

『おおーーーーー』

## 戦争まであと一歩

雄「よし明久Dクラスに宣戦布告の使者として行ってこい」

明「いやだよそんなの、よく映画で下位勢力の使者が宣戦布告しに行ったらひどい目にあうじゃないか」

雄「大丈夫だDクラスの連中は襲ってこない。俺がお前に嘘ついたことあったか？」

明「そうだよ、嘘はよくつくけどこんな無意味な嘘つかないよね、じゃあいつてくる」

明久が教室を出ていくと雄二が凶悪な笑みを浮かべた。

雄「やっぱ明久はバカだなー、あんな単純な嘘に引っかかるとわ」

真「やっぱりそうか、雄二悪い奴だな」

雄「止めなかつたお前が言うな」

秀「おぬしらは全く」

秀吉があきれているがこんなこと日常茶飯事なので大して深刻に考えていないようである

明「だまされたー」



そんなことを言いながらボロボロの明久が戻ってきた

雄「やっぱりあいつらこう来たか」

明「わかつてたの！」

雄「これくらいわからないと代表は務まらない」

明「ちよとは悪びれようか」

真「で、明久そんなことより開戦は何時からだ」

明「真澄そんなことってひどくないかな」

雄「明久、で何時からだ」

明「ぐすつ、この後10時からだよ」

雄「野郎ども、これでもう戦争は避けられない。絶対勝つぞ」

『おとおおお』

姫「おっおー」

姫路も弱弱しくではあるがこの波に乗っていく

Fクラスが試召戦争を行おうとしているときAクラスでは

翔「は、鈍感」

別れ際に頭を撫でられた翔子の顔はまだ赤みを帯びていた。そして自分は今こんなに  
なっているのに相手が何も思っていない様子にちよつと腹を立てながらも自分の教室

に入っていった。

？「では席についてください。私がこのAクラス担任の高橋洋子です。設備に不備はないですか？あつたら申し出てくださいね、ないのであれば自己紹介を始めましょうか」

優「木下優子です。趣味は読書です、よろしくお願いします」

愛「工藤愛子です。スリーサイズは上からB78・W56・H79、趣味は水泳と音楽鑑賞、好きな食べ物はシュークリーム、特技はパンチラです。よろしくね」

久「久保利光です。次席として代表を支えていきたいと思えます」

高「では最後に代表の霧島さんに挨拶してもらいましょう」

翔「霧島翔子です。よろしくおねがいます」

高「では自己紹介も終わりましたし授業に入りましょうか『プルルル』ちよつと待つてくださいね、はい高橋です、はいわかりました。Fクラスが試召戦争始めたそうなので行つてきますから自習しててください」

そういうと高橋先生は教室を出て行った。

優「久しぶり翔子、やっぱり同じクラスになったわね」

翔「久しぶり優子」

愛「久しぶり、優子、翔子」

翔「久しぶり、愛子」

優「久しぶりね愛子」

愛「翔子教室入ってきたとき顔赤かったけどまた橘君と何かあったのかな」ニヤニヤ

翔「／＼／＼そんなことはない」

優「顔が赤いわよ翔子」

愛「隠さずに話してみたら、どうせ橘君に何かされたんでしょ」

翔「／＼／＼：頭撫でられた」

優「相変わらずね橘君、しかもそんなことを何の気なしにしていくんだからたちが悪いわよね」

愛「そういえば、いまその橘君がいるFクラスが戦争起こしてるみたいだけどどつちが勝つと思う？」

優 翔『Fクラス』

翔「Fクラスの代表は雄二、雄二は負ける戦いはしない」

優「たしかに雄二君はそんなことしないイメージあるわね」

愛「そうなんだ、というかなんで優子は坂本君のこと名前で呼んでるの？」

優「へっ／＼／＼なっなんとなくよ」

愛「あつその反応だけでもういいよ」

そんな話がAクラスで繰り広げられていた

## Dクラス戦

F 「Dクラスの連中がいたぞ叩き潰せー」

D 「返り討ちにしろー」

鉄 「戦死者は補習ー」

『いやだー、あそこだけは行きたくないー』

鉄 「安心しろ、補習が終わるころには趣味が勉強、尊敬する人が二宮金次郎と言う模範生になっているわ」

『それは、洗脳っていうんじゃ』

Dクラスとの戦闘が始まり早くもFクラスとDクラスの激突が始まった

F 「こつちはもうきついぞ増援を頼む」

D 「今のうちに一掃しろ、弱っている今がチャンスだ」

美 「吉井どうするの押されているわよ」

明 「うーん、よし総員撤退」

美 「ぼかー、なんでそうなるのよー」

美波は明久の目に思いつき目つぶしをした

明「ぐあー、目がー目がー」

美「目を覚ましなさい。大将のあんたがビビッてどうするのよ、何とか勝てるやり方を考えなさいよ」

明「うーん、もうこの部隊のメンバーはそんなに残ってないし」

清「そこにいらつしやるのは美波お姉さままでわありませんか、五十嵐先生こちらですわ」

美「美春つなんでここに」

明「じゃあ、ここはおねがい」

美「男ならここは俺に任せろとかいうところでしょ」

清「お姉さまに科学で勝負を挑みますわ、試験召喚獣召喚サモン」

美「しかたない、試験<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚」

科学

島田62点 VS 清水96点

美「やっぱりきついわね」

美春の召喚獣が美波の召喚獣に切りかかってく、美波は召喚獣で受け止めるが受けきれずに倒れてしまった。その衝撃で点数が減ってしまう。美春はとどめを刺そうと美波の召喚獣に剣を突きつける。

美「補習室はイヤー」

だが、美春は一向にとどめを刺そうとせず美波本人を保健室のほうへと連れて行くこう  
としている。

清「補習室なんかには送りませんわ、今の時間ならベッドが空いてますわ」

美「それはもつといやー、吉井助けなさいよ」

明久が助けに入ろうとすると美春はまるで親の仇を見るかのような目で明久をにら  
んできた。

明「ごめん島田さん、君の犠牲は忘れないよ」

清「殺します、美春の邪魔をする人は殺します」

須「危ない吉井」

明久に襲い掛かろうとしていた美春を須川が迎え撃ち須川の攻撃で点数が0になっ  
た。

美「西村先生早くこの危険人物を補習室に連れて行ってください」

鉄「点数が0点になったものは補習だ」

清「美春はあきらめませんからねー」

明「島田さん今の戦いで科学の点数減ったでしょ、回復試験受けてきたほうがいいよ」

美「吉井今見捨てようとしたわよね、死になさい吉井サモ」

須「落ち着け島田、吉井は敵じゃない」

美「いいえこいつは敵よ私の敵よ」

明「須川君島田さんは錯乱してるから教室に連れて行って」

須「わかった」

美波が須川に連れていかれた後正面からDクラスの本隊が攻めてきた

秀「明久ー、もう少し持ちこたえるのじゃ」

明「秀吉、もう少し持ちこたえるんだ」

『おおおー』

D「増援が来るまでにつぶせー」

明久は近くにあった消火器を使って周りに消火剤をまき散らして時間稼ぎをした、そして頃合いを見計らってスプリンクラーを作動させた。

秀「よくもちこたえたのう、後は任せるのじゃ」

明「ありがとう秀吉」

明久は教室に帰ろうとしていると敵の大将の姿を発見しここで倒そうとした

明「チャンス、Fクラス吉井明久が」

玉「Dクラス玉野美紀が受けます試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚」

明「近衛部隊っ」



明久がDクラス代表に攻撃を仕掛けようとしていたら近衛部隊によって阻まれてしまったが平賀の後ろに見えた人影に明久は勝利を確信した。

平「君たちFクラスが近づけば気づくにきまつてるじゃないか」

明「そうだね僕では無理だから、よろしく姫路さん」

平「姫路さんじゃないか、Aクラスはこの廊下は通らないはずだけど？」

姫「ごめんなさい、Fクラス姫路瑞希がDクラス平賀君に現国で勝負を挑みます。

試獣<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>」

平「え：サツ試獣<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>」

### 現代国語

姫路326点 VS 平賀128点

姫「ごめんなさいっ」

瑞希の一撃でこの戦争の決着はついた

教『Fクラスの勝利』

F『やったぞー』『本当に勝てた』『これはいけるぞ』

D「まさか、そんな」「Fクラスなんか負けるなんて」

## バカのラブコメはツンデレ

雄「さーて楽しい楽しい戦後対談と行こうか、負け組代表さんよ」

平「わかったよ、でも今日はもういいだろう。設備交換は明日でいいだろうか？」

雄「設備の交換はする必要ないぜ」

F「どういふことだ坂本」「理由によつては許さんぞ」

雄「黙つとけ、俺たちの目的はあくまでAクラスだ、Dクラスの設備なんていらないだろ」

平「いいのか？こちらとしてはありがたいが」

雄「ただし条件がある、外にある室外機を俺が合図をしたら壊してくれ」

平「そんなことでいいなら受けるが、本当にいいのか？」

雄「ああ、俺たちの最終目標はAクラスだからな」

そしてDクラスとの戦後対談は終わり今日はそれぞれ帰宅した

翔「真澄っ」

真「翔子待ってたのか」

翔「うん、戦争終わったの早かったから」

真「と言っても今日の戦争は参加していないけどな」

翔「そうなの？」

真「ああ、次の戦争の時のために俺を温存していたらしい」

翔「がんばってね、真澄」

真「応援してていいのか？俺たちの最終目標はお前たちAクラスだぞ？」

翔「いいの、私たちが必ず勝つから」

真「大きく出たな、でも知ってるだろこつちの代表はあの雄二だ勝てない戦争はしないぞ」

翔「でも負けない、じゃあ私たちが勝ったら真澄に何か1つ言うこと聞いてもらいたい」

真「うーん、いざお前たちが勝ったら俺が可能なことを1つだけ聞いてやる」

翔「約束の指切り」

こうして、翔子と真澄だけの約束が結ばれた

次の日の朝

真「今日は回復試験か、昨日戦ってないし点数減ってないけど雄二が作戦会議するっ

て言ってたし行くか」

真澄が寢室からリビングにいるといつもものように幼馴染の姿があった

翔「おはよう真澄、今日は早かったね」

真「おはよう翔子なにしてんだ？」

翔「朝ごはん作ってたもう少しでできるから着替えとかすましてきていいよ」

真「ごめんないつも、きつかったらいつでもやめていいからな」

翔「好きでやってるから大丈夫」

そんな朝の会話をしながら翔子と真澄は朝食を食べ学校に向かった

真「おはよう、雄二、康太、明久、秀吉」

雄 康 明 秀「おはよう真澄」

真「どうした明久顔に上履きの跡がついてるぞ」

明「ちよつと昨日の戦争の後始末をしただけだよ」

真「何言ってるんだお前？」

明「気にしないでいいよ大丈夫だから」

真「そうか、それより明久勉強はしてきたのか？今日は回復試験だぞ」

明久は試験の単語にソツポを向いたことで真澄はその意味を察した

明「やつとテストが終わったー」

秀「さすがに4教科テストを受けるのは疲れたのう」

真「そうか？そんなに疲れないだろ」

明「そんなこと言うのこのクラスの中だと真澄だけだからっ」

姫「あのもう昼休みですし一緒にお昼食べませんかっ」

真「そうだな腹減ってきたしここじゃなんだから屋上行くか」

雄「じゃあさきについててくれ、俺が昨日の礼も兼ねて飲み物おごってやる」

美「一人じゃ持ちづらいだろうから私も行くわ」

真澄の提案からみんなは屋上に向かった。各々弁当を広げる中明久だけが何も持ってきていないことに瑞希が疑問を投げかける

姫「吉井君はお昼食べない人なんですか？」

明「そっそうなんだよ、僕ってあまりおなかすいてないから」

雄「姫路気にするなこの馬鹿は親の仕送りを全部ゲームとかに費やしてるだけだ」  
飲み物を買って戻ってきた雄二が真実を伝えた

雄「ほら島田、ここでお弁当を作ってきてやるといえばお前の株も上がるぞ」ボソッ

美「／／／そっそんなこと」

雄「確か明久のことを気にしてる女子の話をちらつと聞いたことがあったような」

美「それ本当なの？だとしたら」

明 「どうしたの島田さん？ 顔が赤いけど」

美 「(えーいここは勇氣をもつていつてやる) / / 吉井そんなにおなか減ってるんだつたら明日から私がお弁当作ってあげようか？」

明 「えっいいの」

美 「私のお弁当のついでだからね」

明 「ありがとう島田さん、島田さんって優しいところもあるんだね」

こんなラブコメが繰り広げられ一区切りついたところで次の戦争の作戦会議に移る  
ことになった

真 「次はどこを狙うつもりなんだ？」

雄 「Bクラスだ、次の戦争は真澄にも出してもらおう。Aクラスには証拠がいるから真澄の実力が知れ渡っているがBクラスにはばれていないはずだからそのスキをついてたたく」

真 「了解、聞いた話だがBクラスの代表はあの根元だ、何をしてくるかわかんないぞ」  
雄 「まじか、何か対策を考えないとな。全員に戦争の時は大事なものや貴重品を持ってこないように言うか、姫路は特に気をつけろよDクラス戦の時に活躍してるからな」  
姫 「わかりました。気を付けます」

こうして作戦会議は着々と進んでいきこの日は解散となった

## 卑怯者にはお仕置きを

雄「明久、Bクラスに宣戦布告して来い」

明「やだよ、またボコボコにされるじゃないか」

雄「安心しろ今度こそ大丈夫だ、Bクラスの連中は美少年が大好きなんだ」

明「それは僕にしかできない重要な任務じゃないか」

雄「まあでもお前ブサイクだからな、無理か」

明「何を言っているんだ雄二、365度どこから見ても美少年じゃないか」

雄「5度多いぞ」

秀「実質5度じゃな」

明「そんなことないよ」

真「そうだぞみんな明久はイケメン度0度だ」

明「真澄だけは信じてたのにー」

明久は泣きながら教室を出ていこうとしていると雄二が

雄「泣くのはいいが宣戦布告はちゃんとして来いよ」

明「わかったよー」

雄「やっぱりあいつはバカだったな」

秀「真澄0は言いすぎじゃろ」

真「秀吉も5度とか言ってただろ」

そんな話をしてしていると遠くから叫び声が聞こえてきた、その声から数分後に服がボロボロの明久が帰ってきた

明「何か言うことはあるかな」

雄 真「予想通りの対応だな」

明「謝るとかないのかよー」

雄「俺はちゃんと言ったぞ、お前はブサイクだからなんかさされるって」

真「ちゃんと雄二の言葉を聞かなかったお前が悪いぞ明久」ニヤニヤ

真「そんなことより戦争の日時はいつになつたんだ？」

雄「明久さめざめと泣いてないでちゃんと答えろ」

明「明日の昼休み終了後すぐだよ」

雄「わかった、明日の朝のホームルームでみんなに通達して作戦を発表するから今日は解散だな」

雄二がそういうとみんなは解散した。明日はいよいよBクラスとの戦争ということ  
でみんなのテンションも高かった



次の日

雄「お前ら今日はBクラスとの戦争だが相手の代表はあの根元だ、盗られて困るものは自分で管理しろいな」

F「おおおー」「あんな卑怯者なんかには負けるか」

雄「戦争は今日の昼休みが終わってすぐだその前に作戦を説明しておくからよく聞け」

雄二が教壇に立って今日の作戦を説明し始めた。真澄は初めての戦争にちよつと興奮しているようだ。逆に瑞樹は戦争に慣れていないのか緊張しているようだった。

真「姫路緊張してるのはわかるが落ち着いていけば勝てるから深呼吸しろ」

姫「ありがとうございます橘君それと心配かけてすみません」

真「気にするな、困ったことがあったら遠慮せずに言えよ」

姫「／／あつありがとうございます」

Fクラスの面々は授業を受け昼食を食べいよいよBクラスとの戦争に挑んでいく

雄「お前からこれから戦争が始まるが準備はいいか」

F「やってやるぜー」「ここで勝って設備ゲットだー」

雄「よしあと5分で開始だ。作戦の確認はしとけよ」

作戦の確認が終わろうとしているとき昼休み終了おチャイムが鳴り戦争の開戦が告

げ  
ら  
れ  
た

## Bクラス戦前編

Bクラスとの戦争がいよいよ開始され明久たちが先行して気に攻め込んでいった

F 「Bクラスがいたぞ」「倒せー」「高橋先生連れてるぞ」

B 「高橋先生お願いします」

高 「召喚を承認します」

F B 「試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>モン</sup>」

### 総合科目

Bクラス VS Fクラス

平均1500点 平均700点

明久はあまりの点数の違いに愕然としていた

明 「点数がやばくなったらフォーローに入って」

姫 「はあはあ お待たせしました」

瑞希が遅れて登場したがBクラスは彼女を警戒しだした

岩 「Bクラス岩下がFクラス姫路さんに数学で勝負を挑みます」

木 「律子一人じゃきついだろうから私も手伝うよ」

岩「ありがとう試獣召喚」

木 姫「試獣召喚」

数学

Bクラス岩下&木村 VS Fクラス姫路

151点&189点 412点

明「あれ姫路さんの召喚獣アクセサリーなんてしてたっけ？」

姫「はいっ数学は結構解けましたから」

岩「それって私たちじゃかなわないじゃない」

木「それより早くよけないとやばいよ」

姫「腕輪発動「熱線」」

岩「きやあああー」

木「律子ー」

姫「ごめんなさい、これも勝負なので」

姫路さんの腕輪を見て相手が慌てているがそのうちに瑞希は腕輪の発動のためにエネルギーを溜めはじめそれに気づいた二人がよけようとしたが腕輪を発動した。だが、間に合わず岩下が攻撃を受けて一気に点数が失われた。その後残った木村は姫路の剣に切られて点数を失った

姫「みつみなさんがんばってくださいねー」

F「おぉー」「さすが姫路さん」「姫路さん愛してるー」

明「そろそろ真澄が前線に来るから姫路さんは戻っていいよ」

真「待たせたな第二陣を連れてきたぞ」

明「やつと来たね真澄」

真「姫路俺が変わるFクラス橘真澄がここにいるBクラス全員に数学で勝負を挑むサモン」

B「なめるなよFクラスのクズが」「返り討ちにしてやる」『試獣<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>』

真澄がBクラスの全員に勝負を挑み召喚獣を召喚した。真澄の召喚獣は武器であるハルバードを構えて登場した

### 数学

Bクラス平均 VS 橘真澄

286点 485点

B「なんだと、あいつは本当にFクラスなのか」「あの点数はAクラスでも上位に位置するぞ」「数ではこつちが上だ」「数でつぶせー」

真「さーて、やつと戦えるぜ。とりあえず初めての戦闘だけど悪いが一気に終わらせ

る腕輪発動「重力領域<sup>クラウイティエリヤ</sup>」

腕輪が発動すると真澄の召喚獣の周りから赤い空間が広がった。そうすると周りの召喚獣の動きが鈍くなっている

真「これが俺の腕輪の力グラヴィティエリア「重力領域」だ。この腕輪の発動に250点必要だが俺の周り半径10メートルの範囲内の召喚獣の動きを鈍らせることができる。当然だが俺の召喚獣は影響を受けない、これで終わりだ」

真澄の召喚獣は駆け足で相手のそばに行き止めをさしていく、最後の一人に止めをさした時秀吉が慌てて走ってくるのが見えた

秀「明久相手が網にかかったのじゃ」

明「網?」

真「一応相手がああ根元だったから教室内に罫を仕掛けていたんだ、やっぱり罫にかかったか」

秀「とりあえず教室に戻るぞい」

教室に戻るとBクラスの生徒が3人倒されていた。

真「みんな大丈夫だったか」

雄「真澄戻ってきたか、大丈夫だぞこいつらが文房具を壊そうとしていたがその前に困って袋叩きにしたから」

明「このことを先生に行ったら向こうが反則負けにできるんじゃないの?」

雄「無駄だ、こいつらが勝手にやったって言ったらそれまでだ。だから正面から潰す。真澄と姫路はさっきの戦闘で点数を使っただろうから回復しておけ」

真「わかった。姫路行くぞ」

姫「はいっ。わかりました」

雄「明久たちは真澄たちの補給が終わるまで時間を稼げ。補給が終わったらあいつらを教室に押し込め作戦決行だ」

## Bクラス戦後編

雄「みんな真澄と姫路の補給が言わるまでは戦線を維持してくれ。補給が終わったら一気に決める。今日中に片を付けるぞ」

F「おおおー」「Bクラスなんかには負けるか」「卑怯な手を使うしかできないあいつらに目に物見せるんだ」

プルルル

その時雄二の携帯が鳴った

真「雄二テストが済んでいま採点してもらってる。もう作戦を始めていいぞ」  
そしてその報告が来たあともう一度電話が鳴った

康「雄二、大島先生には頼んできたからこちらはいつでも始められるぞ」

雄「わかった、真澄と姫路のテストも1教科だけだからさつき終わった」

雄「みんな真澄と姫路のテストが終わったと報告があった。今からこの戦争に決着をつけるぞ」

そのころ前線では明久と美波がBクラスの生徒3人を相手に奮闘していた

明「島田さん今雄二から連絡があつてもうすぐ作戦決行だからもうちよつとだけ時間



を稼いでだつて」

美「わかったわ。船越先生召喚許可をお願いします」

船「承認します」

B1「最低クラスの雑魚が調子に乗るなよ、試獣<sup>サモ</sup>召喚」

美「あまりなめないほうがいいわよ、試獣<sup>サモ</sup>召喚」

数学

島田 VS B1

171点 156点

明「島田さんその点数はっ」

B1「最低クラスのくせにこの点数はなんだ」

美「数学なら漢字が読めなくても解けるからそこそこの点数は取れるわ」

B2「この点数はまずいわ、私も加勢するわ」

B3「ここは俺も」

美「吉井あんたも手を貸しなさい明「わかったよ島田さん、まかせて」盾ぐらいにはなるでしょ」

明「ひどいよ島田さんそんな言い方ないんじゃないかな」しくしく

美「さっさと召喚しなさいよ」

明「わかった、試獣<sup>サモモン</sup>召喚」グスツ

B1「こつちは何とかするから二人はあの雑魚を倒してくれ」

B2「わかったわ、試獣<sup>サモモン</sup>召喚」

B3「さつさと片付けてそつちに加勢に行くからな、試獣<sup>サモモン</sup>召喚」

数学

吉井 VS B2 & B3

51点 162点152点

美「さあこつちも再開しましょうか」

B1「さすがにここは退かせてもらう」

明「これで2対2だけど島田さんは点数をかなり消耗しているからここは」島田さん

【あれ】をお願い」

美「これね」

美波が取り出したのは近くにあった消火器だったが美波は一向にそれを使おうとしない

明「島田さん早くそれ使って」

美「うーんどうしよつかない」

明「何が望みなのか」

美「望みか？ならまず呼び方を変えてもらおうかなうちはアキって呼ぶからあんたはうちのこと美波って呼んで」

明「呼ばせていただきます」

美「それから明「まだあるのっ」今週末一緒にクレープ食べに行こうつもちろんあんたのおごりで、それから／＼うちのこと愛してるって言って」

明「うちのこと愛してるー」

美「バカ」

明久が叫んだと同時に消火器から消火剤が噴出した

明「美波さがるよ」

美「わかったわ」

雄「戻ってきたかお前たち二人はここで回復試験を受けとけ、ここからは俺たちが決めてくる」

明「わかった。頼んだよ」

真「俺と姫路が出るようになったからな、なんとかなる」

戦争に決着をつけるために真澄たちが出撃した

そして、Bクラス前の廊下で激しい戦いが繰り広げられていた

真「おいおい俺と姫路には3人がかりかよ」

根「お前ら教室の入り口にたまりやがって熱いんだよ」

雄「Bクラスの代表様は軟弱だな」

根「うるさいぞ負け組代表が」

雄「おいおいあんたが負け組代表になるんだぜ」

根「ふん、負け惜しみを言うな。最大の脅威の橘と姫路は封じているからな」

雄「つち、みんないつたん退くぞ」

根「逃がすな教室の周りから追い出せ」

雄「二たちが退いてBクラスが追いかけて教室の外に出たとき窓から一人の生徒が現れた」

康「Bクラスの根本恭二に保健体育で勝負を挑む」

根「おっおまえはムツツリー二」

保健体育

土屋 VS 根本

441点 203点

こうしてその戦争はFクラスの勝利で幕を閉じた

## Bクラス戦 戦後対談

戦争が終了して今は戦後対談のためにBクラスの教室に集まっている。Bクラスの面々はこれからFクラスの設備を使うことになるのかと代表に蔑みの目を向けている。

雄「よお負け組代表さん、それじゃあ楽しい楽しい戦後対談を始めようか」

根「設備なんてあけ渡してやる」

雄「おい何を勘違いしている、ある条件を守ってくれるなら設備の交換はなしにしてやるよ」

根「条件はなんだ」

雄「条件はこいつだよ」

雄二の言葉に設備を交換しなくていいかもしれないと知りBクラスの生徒の顔に喜びの色が見えた。根本がその話を聞いて条件を尋ねると雄二があるものを取り出した。それは女子用の制服だった。

真「雄二お前にそんな趣味があったとは」

雄「違う、これも後々役に立つんだよ」

真「大丈夫だ俺はどんな雄二でも友達だからな」

雄「ああもういいとりあえず負け組代表さんにはこれを着てAクラスに戦争の準備をしていると宣言して来い」

根「ふざけるな、そんなみつともないことできるぐふっ」

根本が文句を言っているところに他のBクラスの生徒が根本の腹を殴って黙らせた

B「俺たちが責任を持ってやらせる」「そんなことで教室が守れるなら」

雄「明久気付けは頼んだぞ」

明「了解、まかせて。とは言ったものの女子の制服なんて着方わかんないよ」

B「じゃあ、わたしがやってあげるわ」

明「それじゃあお願い。どうせだからかわいくしてあげて」

B「うん無理、土台が腐ってるから」

明「じゃあよろしく、この制服は捨ててこう今日一日は女子の制服の着心地を味わってもらおうかな」

明久は着付けをBクラスの女子に任せて明久は雄二たちと合流した

明「雄二、こっちはもうすぐ着付け終わるよ」

雄「そうか、ならそっちはもう他の奴らに任せとけ。今からAクラス戦の作戦を考えるぞ」

真「雄二さすがに普通の戦争でAに勝つのはきついと思うぞ」

雄「それはわかっている。だから5対5の一騎打ちを提案する」

真「それこそ無理だと思うぞ、翔子は俺がFクラスにいるのを知ってるんだぞ」

雄「それはわかっている。だから一騎打ちの条件としてこっちは真澄を使わないことを条件として出す」

明「でもそれじゃあ勝てないと思うけど」

雄「大丈夫だ翔子は俺が倒す。あいつが絶対に間違えう問題がある」

明「学年主席の霧島さんだよ。そんな問題あるの？」

真「まさか雄二あそこをつく気なのか」

雄「そうだ、あいつは大化の改新を絶対に間違えう」

秀「それはだれが何をしたとかかのう」

雄「そんなややこしい問題じゃない年号だ。この答えは645年こんな問題明久でもわかるがあいつはこの問題を間違えう」

姫「あの一つ質問なんですけど坂本君と橘君は霧島さんとお知り合いなんですか？」

真「あー翔子と雄二とは同じ小学校に通っていた幼馴染だ、ちなみに明久ともこの時に知り合ったんだよ」

雄「そんなことはいいからこれからAクラスに宣戦布告に行くぞ。明久、島田、秀吉、

康太、姫路、真澄はついてきてくれ」

こうして、雄二たち6人はAクラスに向かった

雄「ちよっと邪魔するぞ代表はいるか」

優「代表はいま手が離せないから私が話を聞くわ」

雄「じゃあ単刀直入に言うぞおれたちFクラスはAクラスに5対5の一騎打ちで戦争を申し込む」

優「一騎打ち？何が狙い？」

雄「当然Fクラスの勝利だ」

優「お断りよ、そっちには姫路さんと橘君がいるじゃない。そんなリスクを背負う理由がないわ」

雄「賢明な判断だな。こっちの受けてもらう条件として真澄は出さない、そして代表同士の戦いには俺が出る。これでどうだ」

優「信用できないわね」

翔「雄二の提案受けていい。だけどこっちからも条件がある」

優「だっ代表」

雄「条件はなんだ？」

翔「負けたほうがなんでもひとつ言うことを聞く」

雄「わかった。それでいい」



優「ちよつとまって。それだけじゃ駄目よ。念のため科目の選択権を2つ頂戴。これくらいいいでしょ」

雄「交渉成立だな。戦争は俺たちの回復のために明日の昼休みが終わったらAクラス教室でやるぞ」

こうしてAクラスとの戦争が決まった。明日が最終決戦である。

## Aクラス戦 1回戦

いよいよAクラスとの戦争が始まる。お互いに代表選手5名がスタンバイを終えていた

雄「みんなよくやっていくれた今回のメンバーは真澄を抜いた最高のメンバーだこの勝負に勝ってシステムデスクを手に入れるぞ」

F「おおー」「がんばってくれ」

真「今回俺は見学だからな、たのんだぞみんな」

明「まかせてよ真澄僕たちは勝つから」

真「まあ、明久には期待せずに待っててやるよ」

明「ひどいよ真澄少しくらい期待してくれてもいいじゃないか」

真「そんなことよりも姫路お前は雄二の計算では1勝のうちに入ってるはずだから頑張つて勝ってくれよ。期待してるからな」

姫「／／／そつそんな、でも頑張ります。なので応援してくれますか？」

真「当然だろ同じクラスの仲間なんだから」

そんなやり取りをAクラス側から見ていた翔子の機嫌が若干悪くなっている。だが

そんなことに気づけるはずのない真澄はまだ瑞樹と話していた。そんな真澄にもう限界なのか翔子は真澄に近づき真澄に抱き着いた

翔「……………真澄私にもかまって」

真「うおつ、翔子かどうした？これから戦争だぞ」

翔「どうして霧島さんは橘君に抱き着いてるんですかっ」

翔「私は真澄のお嫁さんだから」

真「そんなでたらめを言ったらダメだろ翔子、姫路翔子とは幼馴染なんだ」

翔「むう、私は真澄がいい」

真「俺よりいい男なんて世界中にいっぱいいるだろ」

翔「そっそんなことありません、橘君はとても優しくてかっこいいです」

翔「その通り、あなたわかつてる。私は霧島翔子よろしく」

翔「姫路瑞希ですよろしくお願いしますね翔子ちゃん」

翔「うんよろしく瑞樹」

翔「でも真澄は渡さない」ひそひそ

翔「っ、私だつて負けませんから」ひそひそ

真「どうしたんだ翔子、姫路」

翔「なんでもない」

姫「そうです。なんでもありませんよ／＼それとです、ね橘君そのあの」

真「どうしたんだ姫路」

姫「／＼／＼私のこと名前で呼んでくれませんか？翔子ちゃんは名前で呼んでもらって  
いてなんか不公平です。わたしも真澄君と呼びますから」

真「そんなことか？別にいいぞ瑞樹」

姫「つ／＼／＼あつありがとうございます」

姫「翔子ちゃんには負けません」ひそひそ

翔「私も負けない、けど真澄は鈍感すぎるから苦労する」ひそひそ

姫「そうなんですよね、遠回しなアピールは全然気づいてくれなくて」ひそひそ

翔「私は積極的に行ってるけど気づいてもらえない、それに毎日お弁当作ってあげて  
るけど無理せずに嫌ならやめていいって言われた」ひそひそ

姫「毎日お弁当作ってあげてるんですかっ」ひそひそ

翔「うん、お母さんが男を落とすならまず胃袋をつかめって教えてくれた」ひそひそ  
姫「あの、今度一緒に真澄君のお弁当作らせてもらえないですか？私一人で料理する  
のを止められているので」ひそひそ

翔「わかった、争うより前にあの鈍感を何とかしないといけないから瑞樹も手伝って」  
ひそひそ

真澄は翔子達が話をしているのを気にしていたが高橋先生が業を煮やしたのか戦争の開戦を宣言したためそちらに目を向けた

高「これ以上遅れてもいけないのでこれよりFクラスとAクラスの試召戦争を開始します。最初の試合の代表者は前に出てきてください」

雄「秀吉行つてくれるか」

秀「了解じゃ」

翔「優子お願い」

優「わかったわ、秀吉科目の選択はどうするの？」

秀「ならば古典で勝負じゃ」

高「古典のフィールドを設定しました」

秀 優 「試験召喚獣召喚 サモン」

古典

秀吉 VS 優子

254点 1ー1

F「おおおー」「すごいぞ秀吉」

優「やるじゃない秀吉そんな点数取れるなんて」

秀「真澄がつきつきりで勉強を教えてくれたからもう、あやつの教え方はわかりやす

くてあやつとする勉強は楽しかったぞ」

優「でも残念だったわね秀吉もつと早く教えてもらえていれば勝てたかもしれないわよ」

古典

優子

398点

優「がんばりは認めるけど私も負けられないから、また頑張んなさい」

優子が言葉とともに自身の召喚獣の槍で秀吉の召喚獣を貫いた

古典

秀吉 VS 優子

LOSE WIN

こうして1回戦はAクラスの勝利で終わった

## Aクラス戦 2回戦 3回戦

高「1回戦はAクラスの勝利、これより2回戦を始めます。代表者は前に出てきてください」

明「雄二次はだれが出るの？」

雄「康太、科目の選択権使っていいから勝て」

康「わかった」

秀「すまぬ負けてしまったのじゃ。康太頼むのじゃ」

康「まかせておけ」

康太はそういうとフィールドへ出て行った。Aクラスの代表選手は愛子が出てきた。

愛「君がムツリーニ君なんだよね。私の名前は工藤愛子っていうの。君保健体育が得意なんだよね、私も得意なんだ。君と違って実技だね」

そういうと愛子は自分のスカートを少し持ち上げた。その行動に康太は興奮したのかすごい量の鼻血を流した。

愛「大丈夫なのムツリーニ君っ、鼻血がすごいけど」

康「問題ない、始めるぞ」

高「ではこれより2回戦を始めます。科目は何にしますか？」

康「保健体育」

愛「本当にいいの？私も保健体育得意なんだよ」

康「俺が負けるわけがないだろ」

高「フィールドの設定が終わりました始めてください」

愛「そう、じゃあ一瞬で終わらしてあげる。試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>モン</sup>」

康「試獣<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>」

召喚のためのキーワードを唱えると二人の召喚獣が姿を現した。愛子の召喚獣は大きな斧を持っていた

保健体育

康太 VS 愛子

446点

愛「バイバイムツツリーニ君、これでおしまいだよ」

康「加速」

愛子が自分の召喚獣の斧を振り上げて康太の召喚獣に切りかかろうとした瞬間康太の召喚獣が消え愛子の召喚獣が鋭利なもので切られていた。その攻撃で愛子の召喚獣の点数が0になった。



## 保健体育

康太 VS 愛子

572点 446点

WIN LOSE

愛「そつそんな私が負けるなんて」

康「お前は強かった。お前のうわさは聞いたことがあったから負けないように勉強していた」

愛「ムツツリーニ君」

康「だが俺も負けられない、学年1位の座は渡さない」

愛「ふふふ／＼、私だつて負けないよ（ムツツリーニ君か、かつこいいな）」

康太と愛子はお互いを認めこれからもライバルであることを誓った。だが愛子の心にはそれとは違う変化も訪れていたことにこの時の康太は気づいていない。

高「第2回戦はFクラスの勝利です。3回戦の選手は前に出てきてください」

雄「明久行ってこい。科目の選択権は使うなよ（まあここは捨て試合だな）」

明「えっ僕なの」

雄「大丈夫だ俺を信じろ。お前を信じてるぞ」

明「雄二…わかったよ行ってくるよ」

明久は雄二の言葉を信じてフィールドへといった。だが明久は見逃していた後ろにいた真澄が必死に笑いをこらえているのを。

明「さあ、僕の相手は誰かな」

佐「私です。佐藤美穂と言います」

高「では科目は何にしますか？」

佐「物理でお願いします」

高「わかりました。設定をします」

明「そろそろ僕も本気を見せようかな」

佐「まさか吉井君あなたは」

明「そうさ僕はまだ本気を出してないんだ」

高「設定が終わりました始めてください」

佐「でも負けません、試獣召喚」

明「試獣召喚、僕はずっと隠してきたけど左利きなんだ」

物理

美穂 VS 明久

448点 43点

WIN LOSE

そんな馬鹿な話をしている間に明久の召喚獣は美穂の召喚獣の鉄球によって倒されて明久自身もフィードバックによってダメージを追っていた

今のところFクラスの1勝2敗でもう勝負を落とせない雄二は明久の勝負には目もくれず次の作戦を考えていた

## Aクラス戦 終結

高「第3回戦はAクラスの勝利です。4回戦の選手は前に出てきてください」

雄「姫路悪いが科目の選択権は使わないでくれ。最終戦は科目の選択権がないと勝てないからな」

姫「わかりました。がんばります」

真「落ち着いて行けよ瑞希。落ち着けばお前なら勝てる」

姫「／／はい、がんばって勝ちますから見ていてくださいね」

真「わかってるから行ってこい」

そう言うと瑞希はフィールドに向かっていった。Aクラスの代表は次席の久保利光が出てきた

高「では科目はどうしますか？」

久「総合科目をお願いします」

高「わかりました。設定しますので待っていてください」

姫「私は絶対に負けません」

久「僕もAクラスの名に懸けて負けるわけにはいかない」

高「準備ができました。始めてください」

久「試獣<sup>サモモン</sup>召喚」

姫「試獣<sup>サモモン</sup>召喚」

召喚されたお互いの召喚獣はつばぜり合いを始めた。その時お互いの点数が表示された

総合科目

久保 VS 瑞希

3985点 4405点

久「ぼつばかな姫路さんの点数は僕とそんなに離れていないはずなのに。どうしてそんなに強くなったんだ」

姫「私はこのFクラスが好きなんです。1つの目的に向かって真つすぐに進めるこのクラスが（それに、真澄君がいるこのクラスが）」

久「Fクラスが好き？」

姫「はい、だから頑張れるんです」

総合科目

久保 VS 瑞希

LOSE WIN

高「これより最終戦を開始します。科目は何にしますか」

雄「科目は日本史形式は小学生レベルの100点の上限ありで」

A「なんだってそれじゃあ100点が当たり前じゃないか」「注意力と集中力の勝負になるぞ」

高「わかりました。いろいろ準備が必要なので少し待っていてください。準備が整ったら放送で呼ぶので視聴覚室に来てください」

そういうと高橋先生は教室を出て行った。たぶんテストを作りに行ったのだろう

雄「お前らのおかげでここまで来ることができた。ここまで来れば俺たちの勝ちほぼ決まったも同然だ。ここで勝てば俺たちの教室はリクライニングシートだ」

F「うおおおおー」

真「雄二、お前ちゃんと勉強はしてきたのか？」

雄「小学生レベルの問題なんて勉強しなくても解ける。楽勝だ」

真澄はこの言葉を聞いてこの戦いの結末が容易に想像ついてしまった

高『準備ができたので代表者は視聴覚室に集まってください、当然のことですがカンニングが発覚した場合その瞬間に失格となります。筆箱のみもって視聴覚室に来てください』

明「雄二がんばってよ」

雄「言われるまでもない」

雄二はそういうと教室を出て行った。翔子も出ていくのかと思っていたら翔子は真澄のほうに歩いて行った。

翔「真澄、私が勝った時の約束守ってね」

姫「翔子ちゃんその約束って何ですか？」

翔「この戦争で私たちが勝ったら真澄がなんでも言うこと聞いてくれるって言った」

姫「えー。ずるいですよ翔子ちゃん。そんな約束してるなんて」

翔「早い者勝ち、瑞希はライバルだから負けたくない」

真「二人とも何の話してるんだ？それに翔子なんでもとはいっても俺にできること限定だからな」

翔「大丈夫、真澄ならできるから。じゃあ行ってくる」

翔子は約束の確認をすると視聴覚室へと向かった。それから少しして教室にモニターが現れた。このモニターで戦いの様子を見守るようだ

高『これよりAクラス対Fクラスの戦争最終戦を始めます。注意事項は放送で言ったとおりです。では始めてください』

それから両者がテストを始めた

( )年 キリスト教伝来

( ) 年 鎌倉幕府設立

( ) 年 大化の改新

( ) 年 応仁の乱がおこる

( ) 年 関ヶ原の戦いが始まる

Fクラスの面々は大化の改新の問題が出たのを確認すると歓喜していた。だが真澄だけは翔子にどんなお願いされるのか想像していた。そうしているとテストが終わり採点も終わっていた。

日本史

雄二 VS 翔子

56点 97点

その結果が出た瞬間にFクラスのメンバーは教室を飛び出し視聴覚室に走っていった。一応真澄も視聴覚室に向かった

明「雄二ーこれはどういうことだよ。これじゃあシステムデスクじゃなくてミカン箱デスクになるじゃないか」

雄「俺の油断だ」

真「まあこうなることは予想してたけどな」

明「どういうこと?」



真「だってこいつ全く勉強してないって言ってたし、こうなることはわかりきってたよ」

翔「雄二が小学生の問題と侮ってなかったら危なかった」

雄「言い訳はしない。俺の全力だ」

翔「それより勝った時の約束、真澄私と付き合って」

真「は？・・・何言ってるんだ翔子？」

翔「私は昔から真澄が好きだっただから付き合って」

姫「だっだめです。そんなの」

真「???なんで瑞希が否定するんだ？それにいまいち状況がわからないんだが」

翔「瑞希邪魔しないで。真澄とは私が付き合うの、ずっと昔から思ってたんだから」

姫「ダメなんですそんなの。私だって真澄君のことが昔から好きだったんですから。

絶対にその告白は無効です」

瑞希と翔子がい争いをしているさなか話題の中心の真澄はこの状況を整理していた。だが今までそんな対象として2人を見てこなかった真澄は頭の中が混乱していたがここで1つの結論に至った

真「翔子、瑞希その2人の気持ちはうれしいんだけどそういうのまだわからないから待っててもらえないか」

真澄のその言葉に2人の思考にある考えがよぎった。このまま行つて真澄の好きな人が増えていくと優しい真澄はだれか一人を選んでほかの人を悲しませるのを嫌いな員を振るのではないかと

翔「瑞希ちよつと提案がある」ひそひそ

姫「奇遇ですね翔子ちゃん私も提案があるんですよ」ひそひそ

翔「瑞希の提案と私の提案は多分同じものだと思う。どうする？」ひそひそ

姫「それでいきましよう」ひそひそ

翔「真澄、瑞希と話し合つて決めた。真澄私たちと付き合つて」

姫「そうです、私たちは真澄君が好きです。でも私たちは仲良くしていきたいので真澄君私たちと付き合つてください」

真「???お前たちはそれでいいのか？」

翔「相談して決めたって言ったでしょ」

姫「私たちはみんなで幸せになればいいんです」

真「こんな優柔不断な俺でお前たちが本当にそれでいいなら、俺と付き合つてくれ」

姫 翔「喜んで」

真澄はそれを聞き彼女たちの覚悟が伝わってきたので2人の覚悟を無にできないと感じ2人と付き合うことにした。それを見ていた一部の人たちは自分も頑張ると意気

込んだものもいれば落ち込む者もいたり自分の胸のもやもやに頭を混乱させているものもいた

## 日常はピンク色

試召戦争から数日が立ち真澄の家に翔子とともに瑞希が来るようになった以外そんなに変化がない

そして今日も二人は真澄のために朝ご飯を作りに来ていた

翔「真澄朝だからおきて」

姫「真澄君朝ですよ。朝ごはんができませんでしたから早く起きてください」

真「毎朝ごめんな二人とも。無理だけはしないでくれよ」

姫「私は好きでやっているので大丈夫ですよ。早く朝ご飯食べて学校に行きましよう」

真「そうだな早く食べるか」

翔「今日は瑞希が朝ごはん作った。そしてお弁当は私」

真「ありがとうな二人とも本当に俺にはもつたいない彼女だよ」

翔「／／／そんなことない。真澄のほうが私たちにもつたいない」

姫「／／／そうですよ。私たちは真澄君のことが大好きなんですから」

朝から砂糖を吐きそうな甘すぎるラブコメを展開していた三人は朝ご飯を食べて学

校に向かった

愛「おはよう、代表、瑞希ちゃん、橘君。朝からイチャイチャしてるね」

真「おはよう工藤さん。二人とも俺の彼女なんだ別にいいだろ」

愛「あれ？ちよつと前までこのネタでからかったら顔赤くして狼狽してたのに」

真「そりゃ、あれだけからかわれたら慣れるさ」

愛「でもまだその二人の彼女は慣れてないみたいだよ」

姫 翔「／／／」

愛子の言う通り二人の顔は真つ赤になつていた。まだこの二人は慣れていないよう  
で愛子のからかいにいつも顔を赤くしている。翔子は自分から行くのは大丈夫でも他  
人に指摘されるのは慣れていないようで黙つてしまう

翔子とはクラスが違うため授業中は一緒にいられないが授業が終わるとすぐに真澄  
のもとに現れて休み時間のぎりぎりまで甘えている。そして昼休みは屋上でいつもの  
メンバーに翔子と愛子を加えて食べている

翔「はい真澄今日のお弁当。食べて」

真「今朝言つてたやつか。ありがとう翔子」

美「アキ、今日の分上げるから感謝しなさいよ」

明「ありがとう美波。美波の弁当はおいしいから楽しみにしてるんだよね」

美「／＼／＼いっいつも言ってるけど私と葉月の分のついでなんだから」

明「それでもうれいよ。ありがとう美波」

雄「康太、秀吉これはなんなんだ？そこらかしこにピンク色の空間が見えるんだが」

康「ブラックコーヒーを所望する」

秀「ほっとけばよからう、気にすることでもないわっ」

雄「どうしたんだよ秀吉、この頃毎日機嫌が悪いような気がするが」

秀「なんでもないのじゃ。わしはいつもどおりじゃ」

優「(秀吉、まさか橘君のこと)まあ、それより早くご飯食べましょう。時間が無くなるわよ」

愛「そうだね、早く食べようよ」

優子の提案に愛子が乗ってみんなで昼ご飯を食べ始めたが秀吉の機嫌は悪いままだった。なぜ秀吉の機嫌がおおまで悪いのかは姉弟の優子以外は知ることができなかつた。

## 清涼祭準備期間

翔「真澄今度オープンする如月ハイランドって知ってる？」

真「確か今建造中の大型テーマパークだろ」

姫「私も知ってますよ。確かもう少ししたらプレオープンするはずですよね」

翔「そう、真澄そこのプレオープンのチケットを手に入れたら私たちとデートに行つて」

真「いいぞ。デートで遊園地なんて言ったことなかったからな」

姫「たのしみですね」

真澄は自分の彼女たちと下校しているときに次の遊園地デートの予定を練っていた。翔子ももし手に入れられなくても大丈夫なように別の計画を練っていた

そんな考えをしていた真澄は新学期初めてのイベントである清涼祭のことに目を向けていた。今日は清涼祭の話し合いだったが翔子がAクラスと合同でやらないかと提案してきたため合同でご奉仕喫茶をすることになった。

ちなみに実行委員は美波と明久である。

次の日

美「じゃあ、昨日決めたことの確認をするわよ。アキ黒板に書いて」

明「たしか、教室はAクラスを使って調理班とホール班に分かれるんだったよね」

美「そうよ、今からホール班と調理班を分けていくわよ。立候補はある？」

姫「私は調理班に入りたいんですけど」

明「ダメだよ姫路さんはかわいいんだからホールにいて接客してくれないと」

真「そうだぞ瑞希、自分に自信を持ってお前は俺が惚れた彼女なんだから」

姫「／／／そつそんなこと」俯いた

秀「真澄よ、教室内でいちやつくのはやめるのじゃー！」

真「俺は事実を言っただけなんだがな？そう言う秀吉も接客すればいいんじゃない

か。傍から見ればかわいい顔してんだから接客すれば演技の練習になるだろうし客引

きにもなるし」

秀「むー、そうかのう？なら挑戦してみようかのう（あやつはいきなりなにをいいだ

すのじゃ／／／これじゃから真澄は女たらしなんじゃ）」

美「私は調理班に行こうかなー」ちらちら

明「いいんじゃないかな。美波のお弁当いつもおいしいから適任だと思うよ」

美「／／／そつそうかしらじゃあ調理とホールの両方がんばるわ」

明「がんばってね美波」



美「じゃつじやあこれで決定でいいわね。あとはこつちで決めるから今日は解散ね」  
こうして話し合いが終わり今日の授業が始まった。明久が寝ており鉄人の鉄拳制裁を食らっているが自業自得なのでほおっておく。そうしてお昼になった。

翔「真澄迎えに来た。屋上行こう」

真「ありがとう翔子。みんな屋上行くぞ」

真澄いつものメンバーは屋上で弁当を食べつつ清涼祭についての話題で盛り上がっていた。

真「翔子はどつちで行くんだ？」

翔「私はホール。真澄もホールをやるの？」

真「たぶんそうなるかな。優子と愛子はどうするんだ？」

優「わたし？わたしもホールよ」

愛「僕もだよ。ちなみにムツツリーニ君僕ねメイド服の下にはスッパツ履かないつもりなんだー」

康「スカートの中、スッパツなし」ブシャアアアア

康太がいつものごとく鼻血を噴射してけいれんを起こしつつ倒れた。こんないつものような昼を食べていた。

## 恋する少女に戻るため

次の日

真澄たちは普通に自分の教室で授業を受けいつものメンバーでお昼を食べようとして  
いると

藤「2年Fクラス坂本雄二、吉井明久至急学園長室まで来な」

雄「なんでおれなんだ！明久だけならまだしも」

明「ちよつと雄二それどういう意味なの」

雄「とりあえず行くぞ明久」

明「ちよつと僕の突っ込みスルーしないでよ雄二」

雄二が明久の言葉を無視しつつ学園長室まで歩いていこうとしているのを見た明久  
は雄二の後を追っていった

真「あいつらはまた何かやらかしたのか？」

秀「わからんがいつものことじゃし屋上で待っておけばよからう」

真「そうするか。翔子たちも待ってるだろうし」

雄二と明久が学園長室に到着し中に入ろうとすると扉の向こう側から言い合いのよ  
うな声が聞こえてきた

(申し訳ありません。この流れは原作と一緒になのでカットします。文章力のない私を  
許してください)

雄二と明久が学園長の提案を受け入れ屋上に向かいそこにいたメンバーに呼び出さ  
れた事情を話し始めた。

雄「ここで聞きたいんだがこの中で召喚大会に出ようと思ってるやつはいるか？」

翔「私が瑞希と出ようと思ってる」

美「私はアキを誘おうと思ってるけどそんな事情があるなら今回はパスするわ」

優「私も坂本君誘おうと思ってるけど今回はいいかな」

明「ごめんね美波。またイベントがあったらペア組もうね」

雄「悪いな木下。また機会があったらな」

雄「まとめるとこの中で出ようと思ってるのは翔子と姫路だけか？」

真「そうなるな。俺は出る予定はいまのところないしな」

雄「ババアには翔子たちがとつた場合でも問題ないことを説明して教室の件を交渉し  
てみるか。負ける気はさらさらないがな」

翔「私たちも負けない。真澄と遊園地に行くために」

こうして屋上での話し合いが終わりいよいよ明日から清涼祭の本番である

秀「真澄よ、少しお願いがあるのじゃが放課後残ってくれぬか？」

真「別にいいぞ」

放課後

真澄は秀吉に言われた通り教室で待っていた

秀「待たせたの真澄」

真「そんな待つてないから気にするな。それでお願いってなんだ？」

秀「それなんじゃが、わしと組んで召喚大会に出てほしいのじゃ」

真「別にかまわないがどうしたんだ？急に」

秀「そのじゃな。優勝賞品に如月ハイランドのプレオープンチケットがあるじゃろう？あれが欲しいのじゃ」

真「なんでまた？」

秀「そつそのじゃな今度の演劇で遊園地デートのシーンがあるんじゃが経験がないからどのように演技すればいいのかわからんのじゃ。だから優勝したら真澄に遊園地に付き合ってほしいのじゃ」

真「俺はかまわないが俺でいいのか？」

秀「頼む真澄！」

真「わかったよ。なら明日朝一で登録に行くか」

秀「ありがたいなあのじや真澄」

秀吉は明日の約束をした真澄と別れた。

？「優勝すれば真澄を誘って遊園地に行けるのね／＼。がんばらないと。あの二人には負けないっ」

そうつぶやいたのはいつもの爺言葉をしゃべる男の子ではなく一人の男の子に恋をする少女だった。

## 清涼祭開幕

今日から清涼祭が始まるんだが朝翔子と登校していると雄二に教室まで呼び出され今朝学園長との交渉が決まったことが発表された

雄「とりあえず俺たちのクラスの関係者が優勝すれば問題ないということになったが、ババアに追加の条件が提示された優勝できなかった場合今回の学園祭の売り上げは学園側にすべて寄付することになった。つまり、教室の設備改善ができなくなる」

明「だから絶対に優勝しないといけないんだよ。美波や姫路さんのような女の子をこんな教室にいつまでも置いておけないしね」

真「事情は分かった。とりあえず清涼祭で稼がないと優勝しても設備改善ができないからまず稼がないといけないな」

雄「それについては秀吉と姫路と島田に接客班に回ってもらい後は真澄にも主に女子の相手をしてもらえればそこそこ何とかかなるはずだ」

こうして清涼祭の役割を決められ準備も終わり清涼祭の開幕を待っていると放送が流れた

『皆さん準備は万端ですか？ではこれより清涼祭の開始を宣言します!!今日から2日間

楽しみましょう』

放送により清涼祭の開会が宣言された

雄「おまえら、開幕だ。絶対に成功させるぞ」

『おおおおお』

こうして清涼祭が始まった。

店は順調に売り上げを伸ばしていた。その要因となつているのが

真「よくお越しく下さいましたお嬢様。こちらのお席へどうぞ」

客「はっはい／＼」

真「お嬢様お顔が赤いですが大丈夫でしょうか」顔を近づけながら

客「だっだいじょうぶですう／＼」

これである。真澄たちのクラスではメイドと執事がもてなすご奉仕喫茶なのだ。なぜか完璧な執事をしている真澄の影響で女性客を中心に盛況である。さらに女性客だけではなく瑞希や美波、秀吉の接客も好評で男性客も結構来ていて店は大忙しである。

明「雄二。そろそろ召喚大会の一回戦始まるよ」

雄「そうだな、真澄!!俺と明久は大会の一回戦出てくるからしばらく頼むな」

真「わかった。こっちは何とかしとくから負けんなよ」

雄「誰に言つてやがる。負ける気がしないぜ」

そう言うのと雄二と明久は会場に向かっていった。今回の召喚大会に参加するのは16組で決勝と準決勝は一般に公開されるがそれ以外は公開をされない。今日は準々決勝までやって明日準決勝と決勝を行うのである。

このように順調に清涼祭は進んでいった。雄二、明久、ペア翔子、瑞希、ペア秀吉、真澄、ペアは無事今日の戦いを終え明日行われる準決勝にコマを進めた。だがある一人の男の身勝手な欲望によってとある事件が起こってしまった。

なんとFクラスで働いていた姫路瑞希、島田美波、木下秀吉の3名が誘拐されてしまったのだ。